



|              |                                                                             |
|--------------|-----------------------------------------------------------------------------|
| Title        | 日本文化的価値観に基づく死生観の研究に関する考察                                                    |
| Author(s)    | 山口, 史織                                                                      |
| Citation     | 生老病死の行動科学. 2022, 26, p. 55-61                                               |
| Version Type | VoR                                                                         |
| URL          | <a href="https://doi.org/10.18910/87659">https://doi.org/10.18910/87659</a> |
| rights       |                                                                             |
| Note         |                                                                             |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 日本文化的価値観に基づく死生観の研究に関する考察

### Consideration of Research on the View of Life and Death Based on Japanese Culture

(大阪大学人間科学部人間科学科) 山口 史織<sup>1</sup>

(Osaka University, Undergraduate School of Human Sciences) Shiori Yamaguchi

#### Abstract

The study of the views of life and death developed mainly in the West. However, it is important not to overlook the view of life and death based on cultural differences. This note discusses the idea that in Japanese culture, life and death are inseparable, that death is a part of life, that life has value because of death. This can be seen in the context of existing life and death scales. This differs from the Western view of life and death, which separates life and death and focuses only on death. However, there are differences among the scales in terms of the Japanese cultural view of life and death, so further research is needed. In addition, the existing scales have their own merits and demerits, and there is no single scale that can adequately measure the Japanese view of life and death. Therefore, it may be necessary to create a unified scale based on previous research.

**Key words:** death and dying, view of life and death, cultural differences

#### はじめに

死生観は人間の重要な価値観の一つである。死は絶対に避けられず、遅かれ早かれ向き合わざるを得ないものだからだ。では、日本人は死をどのように捉えているのだろうか。現代社会において、死は人生と対峙するものとされているようである。例えば、死はタブー視されていると言われたり、むしろそのタブーは解消されたと言われたりしている（澤井, 2002）。死のタブー化についての結論はいまだ出ていないが、そのような議論が起こること自体が、死が抑圧の対象となり得る特別な事象となっていることを示している。死は怖がって避けたり腰を据えて取り組んだりする対象と位置付けられているようだ。一方、後節で述べるように、日本文化的な死生観では、死は人生の一部であり自己の生と共にあるもの

であった。日本人は「死を意識することで今ある生を意味あるものに出来る」と考えることで、生死両方の意味を見出していた。

死の位置づけが「生と共にあるもの」から「生と対峙するもの」に変化していることは、日本人の心の豊かさに関連していると考えられる。ただし、本稿では生きがいや希望をもてること、生きる意味を感じられることを心の豊かさだと見なしている。死生観と心の豊かさとの関連については、例えば

「我々の魂は、「生まれ変わり」を繰り返している、という仮説を信じますか。」という問いに対し「信じる」と回答した大学生はより生きがいを感じていること（大石, 2007）や絶望感と死に意味はないと考えることには正の相関があること（Van Laarhoven, Schilderman, Verhagen, Vissers, & Prins, 2011）が先行研究で示されている。

日本人の心の豊かさの現状は内閣府が行った調査結果から考察できる。「これからは心の豊かさか、まだ物の豊かさか」と尋ねた結果では、「心の豊かさ」と回答した人が47年間で24.7%増加している（内閣

<sup>1</sup> Correspondence concerning this article should be sent to; Shiori Yamaguchi, Undergraduate School of Human Sciences, Osaka University, Osaka, 565-0871, (u889876a@ecs.osaka-u.ac.jp)

府, 1972, 2019)。しかし幸福度はほぼ変化しておらず(内閣府, 1978, 2011), 心の豊かさを希求しているものの現実が伴わず, 心理的に満たされないと感じる人が増えていると予想される。死生観と心の豊かさとの関係を考えれば, 死を「生と対峙するもの」と位置づける風潮は, 現代人の心が満たされない原因の一つとなっているのかもしれない。

このような社会状況を改善するためには日本文化的な死生観を見直す必要がある。日本文化的な死生観は薄れてきているとはいえ、完全になくなったとは考えにくい。お盆等の習俗をみると生者と死者との境目は曖昧であり, 現代の日本人も死を生と切り離さず捉えている部分があると言える。現代社会においても人生を有限だからこそ価値があると考え人は生きる意味を実感しやすい可能性があり, このような死生観があることに再び目を向けその価値を知ることが重要なのではないだろうか。

この仮説を検証するためには, まず日本文化的価値観に基づいた死生観が日本人の死生観の中に含まれていることを示さねばならない。死生観の構造の解明は尺度構成によって行われているため, 既存の尺度で明らかになっている要素を整理し日本文化的な側面の詳細を明らかにする必要がある。そこで本稿では, 初めに日本文化的価値観に基づく死生観の内容を示し, 次に日本文化的価値観に基づく死生観を測っていると考えられる既存の尺度の内容について考察した。

### 日本文化的価値観に基づく死生観

生や死についての考え方を考察するためには, その主体である人間をどのような存在であると捉えているか, という点に注目する必要がある。西洋人と東洋人の思考に関する様々な実証研究を比較した Nisbett (2003 村本訳 2004) は, 西洋人にとって世界は個々の対象物の集合であり人間は唯一の完全な個性を持った存在であるが, 東洋人にとって世界は部分ではなく全体として理解すべきものであり人間は周囲との関係の中でのみ存在すると指摘した。日本人の自然観を分析した渡辺 (2003) も, 西洋では人間が自然と対峙しているのに対して日本では人

間が自然の中にあると述べている。このように日本文化的価値観において人間は自然の中の一部であり, それはつまり人間の生死もまた自然の一部であったということだと考えられる。

また, 日本人に死からの連想語を挙げさせると, 対象者の47.5%が神や仏, 死後の世界, 宗教に関連することなど「信仰」に分類される言葉を回答した(丹下, 2002)。つまり信仰もまた, 死生観を考えるうえで欠かせない要素であると言える。日本人の代表的な宗教的信仰のひとつである輪廻転生は, 前の生での行いにより次の生が決まり, 清らかな行いをする高い身分階級の人間に生まれ変わるが醜い行いをする身分の低い人間や家畜や虫に生まれ変わるという考え方である。この思想では死は次の生への入り口である(森口, 2017)。輪廻転生思想を含む仏教は6世紀頃に日本に伝来したが, それ以前より日本文化に根付いていた神道には人は死してなお家族や子孫を草葉の陰から見守り守ろうとするという考えがある。また善人も悪人も死ぬと皆黄泉の国に行くとも考えられている(渡辺, 2012)。仏教でも神道でも死は生を終わらせるものではなく新たな生の始まりであり, 日本人にとって生死は循環するものであったと言える。

さらに, 日本文学の特徴のひとつと言われるのが無常観である。無常観は何事も移り変わり, すべては儚いという価値観であり, 『方丈記』の「ゆく川の流れば絶えずして しかももとの水にあらず。」から始まる一節や幸若舞の『敦盛』, 『いろは歌』や『平家物語』の冒頭など様々な文学作品に表現されている。無常観は広く日本人に根付いており, 儚いということに価値が見出されていた(島藺, 2012)。死を意識することは生の儚さを意識することであり, 儚い命を大切に生きることにつながったと考えられる。また, 日本人にとって元々生と死は表裏一体であり, どちらか片方のみを取り上げることは出来ないものだったと言える。

以上のことから, 日本文化的価値観に基づく死生観とは「人間の命は自然の中の一部であり, その中で生と死が繰り返されている。死があるからこそ生が尊いのであり両者は切り離せないものである。」という価値観であり, 生死をひとまとまりに捉える

ものであると考えられる。

### 死生観研究の現状

死生観の初期の研究は、死の不安や恐怖に関するものであった。その後、不安や恐怖以外の面にも目を向け、死生観を多次元的に捉えるべきであることが指摘されてきた（Gesser, Wong, & Reker, 1988; 金児, 1994a; Wong & Tomer, 2011）。さらに、死生観の関連要因（例えば、年代（田中, 2001）、死別経験（Donnelly, Umberson, & Pudrovska, 2020）、心理的要因（Kumagai, Morioka, Yoshimasu, Tomita, Miyai, & Miyashita, 2008））の研究も進められている。しかし、例えば「死生観」という言葉の定義すら研究者によって異なっている（越智, 2014）など、確立された見解がない部分も多く、さらなる研究の蓄積が期待される分野である。

死生観研究は西洋を中心として発展してきた。死生観の実証的研究で最もよく使われている尺度は死の不安を測るために米国の研究者により作成された Death Anxiety Scale (DAS) (Templer, 1970) である（丹下, 1999）。死の恐怖・不安以外の側面も含めて測定する尺度としてはカナダの研究者らにより作成された Death Attitude Profile (DAP) (Gesser et al., 1988) やその改訂版 (Wong, Reker, & Gesser, 1994) が頻繁に用いられている。日本における死生観研究も現在まで盛んにおこなわれてきたが、多くの研究では西洋で作成された尺度の邦訳版（隈部, 2006; 田中, 2001）やそれらを参考に作成した尺度（平井・坂口・安部・森川・柏木, 2000; 川島, 2019）が用いられている。

ここで注意すべきなのは、死生観には文化や宗教が反映されると指摘されている点である。（Tierney, 2001; Walter, 2003）西洋の死生観はユダヤ教・キリスト教に準拠して生と死は切り離して考えられており（丸山, 1997）、西洋で作成された尺度には西洋の死生観が反映されている。例えば DAP-R (Wong et al., 1994) は "Approach Acceptance", "Fear of Death", "Death Avoidance", "Escape Acceptance", "Neutral Acceptance" の 5 因子構造であり、

生と死を切り離して死のみに焦点を当てて死生観を測定していると言えるだろう。

一方で、前節で述べたように、日本文化的価値観に基づいた死生観では死と生をひとまとまりに考えるという点が西洋の死生観とは異なっている。日本人の死生観を検討する際に西洋の死生観尺度をそのまま適用すると、日本人の死生観の一部しか捉えられず他の側面を見落としてしまう可能性がある。そのため、日本人の死生観を研究する際には日本文化的価値観に基づいた死生観を意識して作成された尺度を使用すべきであると考えられる。

### 先行研究により示された日本人の死生観

これまで述べてきたような、日本文化的価値観に基づいた死生観の詳細を確認するため、死生観に生の側面や生と死の両方に関する側面を含めるべきだと言及しているか、文化的・宗教的要因に基づいた日本独自の死生観尺度の作成を試みていることが記載されている尺度を選び、その因子から日本人の死生観にはどのような構成要素が見出されているか検討した。尺度は 2021 年 8 月に CiNii Articles にて「死 and 尺度」という検索キーワードを用いて検索した。その結果 14 個の論文で死生観関連尺度が作成されていることがわかり、そのうち前者の基準を満たす青年期における死に対する態度尺度（丹下, 1999）、看護師の死生観尺度（岡本・石井, 2005）、成人期の生と死に対する態度尺度（田中・斎藤, 2016）の 3 つと、後者の基準を満たす死生観尺度（平井他, 2000）を選択した。さらに、CiNii における検索ではヒットしなかったものの、筆者の知る限り最も早く「日本人固有の死観を捉える」ために死生観関連尺度を作成している金児（1994b）を検討に加えた。5 つの尺度の詳細を Table 1 に示した。

西洋の死生観と日本文化的価値観に基づいた死生観の違いは死のみに焦点を当てるか、それとも生と死の両方に焦点を当てるかという点であったことを踏まえて 5 つの尺度を見ると、それぞれの因子は「死に焦点を当てた因子」、「生に焦点を当てた因子」、「生と死の両方に焦点を当てた因子」のいずれかに

当てはまることがわかった。

どの尺度も因子の多くは「死に焦点を当てた因子」であった。具体的には、死観尺度の「暗闇と消滅」「浄福な来世」「苦痛と恐怖」「虚無主義」「無関心と逃避」「未知なるもの」、死に対する態度尺度の「死に対する恐怖」「死の軽視」「死後の生活の存在への信念」「身体と精神の死」、死生観尺度の「死後の世界観」「死への恐怖・不安」「解放としての死」「死からの回避」「死への関心」、看護師の死生観尺度の「死の不安」「身体と精神の死」「遺体への想い」「死後の世界」「人生の終焉」、成人期の生と死に対する態度尺度の「死への恐怖・不安」「死後の世界への信念」が該当する。「死に焦点を当てた因子」には、死に対する恐怖や不安、死後に対する信念、死をこの世からの解放とする価値観、死に対する関心、身体と精神の死を区別する価値観、死に対する虚無感、死は未知なものだという感覚といった要素が見られる。尺度間で大きな違いは見られず、死生観の死に焦点を当てた側面に関しては構造がかなり解明されていると言える。

死観尺度の「生の証」、死に対する態度尺度の「生を全うさせる意志」、死生観尺度の「人生における目的意識」、成人期の生と死に対する態度尺度の「人生の目標」「生への執着」は「生に焦点を当てた因子」であった。これらの因子には人生の目的や意味と生きる意志という2つの要素が見られた。片方しか含まれていない尺度、どちらも含まれていない尺

度、両方の要素が含まれている尺度があり、死生観の生に焦点を当てた側面に関して統一的な見解はまだないと考えられる。

「生と死の両方に焦点を当てた因子」だと考えられるのは死観尺度の「身近なこと」「人生の集大成」、青年期における死に対する態度尺度の「人生に対して死が持つ意味」、死生観尺度の「寿命観」、看護師の死生観尺度の「死の準備教育」、成人期の生と死に対する態度尺度の「生と死のつながり」であった。これらの因子には死の教育的意義、死を身近に感じる感覚、生死は決められたものだという信念、生における死の重要性という要素が見られた。尺度によって含まれる要素が異なっており、死生観の生と死に焦点を当てた側面に関してもまだ研究が尽くされていないと考えられる。

このように、先行研究で明らかになった死生観には死に焦点を当てた側面と生に焦点を当てた側面、また生と死の両方に焦点を当てた側面が含まれている。生死をひとまとまりに捉えるという日本文化的価値観に基づいた死生観は「生と死の両方に焦点を当てた因子」の中に含まれていると推測され、先行研究において日本文化的価値観に基づく死生観が確認されていることが示された。しかし各尺度で構成要素が異なっているため上述した要素に過不足がないかという検討は出来ない。日本人の死生観の構成はいまだ全貌が見えておらず、更なる研究が必要であると言える。

Table 1. 日本文化に基づいた死生観を測定しようとしている尺度

| 著者           | 尺度               | 測定概念の定義                                     | 因子                                                            |
|--------------|------------------|---------------------------------------------|---------------------------------------------------------------|
| 金児 (1994b)   | 死観尺度             | 死に対する総体的態度構造 (金児, 1994a)                    | 暗黒と消滅, 苦痛と恐怖, 浄福な来世, 無関心と逃避, 人生の集大成, 生の証, 未知なるもの, 虚無主義, 身近なこと |
| 丹下 (1999)    | 青年期における死に対する態度尺度 | 主体となる本人が自己の死もしくは一般的な死に対して抱いている態度            | 死に対する恐怖, 生を全うさせる意志, 人生に対して死が持つ意味, 死の軽視, 死後の生活の存在への信念, 身体と精神の死 |
| 平井他 (2000)   | 死生観尺度            | 記載なし                                        | 死後の世界観, 死への恐怖・不安, 解放としての死, 死からの回避, 人生における目的意識, 死への関心, 寿命観     |
| 岡本・石井 (2005) | 看護師の死生観尺度        | 死と生にまつわる価値や目的などに関する考え方で, 感情や信念を含む, 行動への準備体制 | 死の準備教育, 死の不安, 身体と精神の死, 遺体への想い, 人生の終焉, 死後の世界                   |
| 田中・齋藤 (2016) | 成人期の生と死に対する態度尺度  | 生や死, 命に対する評価や感情, 考え方                        | 死への不安・恐怖, 人生の目標, 死後の世界への信念, 生と死のつながり, 生への執着                   |

## 死生観尺度の確立に向けた提言

前節で示したように、日本で作成された死生観関連尺度には日本文化的価値観に基づく死生観が含まれており、今後の死生観研究では死のみに焦点を当てるのではなく生と死の両面に焦点を当てる必要がある。また、日本文化的価値観に基づく死生観について今後の実証的研究を行っていくためには、各尺度で異なっている構成要素を統合的に検討し、日本人の死生観を測定する際にふさわしい尺度を確立する必要がある。そこで本節では前節で取り上げた5つの尺度の特徴からどのような尺度が必要であるかを検討した。

「死観尺度」の特徴は他の4つの尺度とは異なる死生観の側面を捉えている点である。例えば「虚無主義」や「未知なるもの」という因子は死観尺度のみに含まれており、死生観研究の新たな方向性を示している。一方で因子名と項目の測定概念が一致していない可能性がある点に注意が必要である。この尺度には2つの因子に負荷が高い項目や項目に対して因子名が適切でないと考えられる因子が含まれている。例えば「浄福な来世」因子は宗教性の強い理想の世界としてのあの世や生まれ変わりに関する項目が含まれると説明されているが、この因子に含まれる「死は次の命のために場所を譲ることである。」「死は何らかの罪を罰するためにやってくるものだ。」「死は人間のパワーになる。」といった項目はその説明に沿っているとは言えない。また、項目数が102項目と非常に多く回答者の負担になることも予想される。

「死に対する態度尺度」は筆者の知る限り死生観関連研究の中で初めて生も含めた死に対する態度を測定しようとした尺度であり、それまでの恐怖や不安のみを追求していた研究の方向性を修正したという点で優れている。例えば、死に対する態度尺度には「死に対する恐怖」因子や金児(1994b)にも類似する因子がある「死後の生活の存在への信念」因子以外に「人生に対して死が持つ意味」因子や「生を全うさせる意志」因子などが含まれており、日本人の死生観が複雑な構造をもっていることを示した。

一方で因子名の一部には疑問が残る。「死の軽視」因子には死を他人事、もしくはこの世からの解放だと捉える項目が含まれているが、死をこの世からの解放だと捉える人は死を軽視していると解釈することは妥当だとは言いがたい。

「死生観尺度」の長所は日本人の死生観を簡便に測定出来るという点、死生観を多次的に捉えられるという点である。そのためこの死生観尺度は日本における現在までの死生観研究で広く使用されており、使用者が他の研究と結果を比較しやすいという利点がある。項目が絞られているために丹下(1999)の死に対する態度尺度のようにひとつの因子が複数の要素を含むということもない。一方で死生観という概念の定義がなされていないという懸念点がある。概念の定義が明確でないことは、その尺度が意図する概念を適切に測れているか判断することが出来ないという問題につながる。また、死生観には文化的要因が関係するため日本独自の尺度を作成したと述べているが具体的にどういった文化的要因が考えられるかということに言及されておらず、また生に焦点を当てた因子は1つで生と死の両方に焦点を当てた因子は含まれていないことを考えると、日本人の死生観を測る尺度として十分ではない可能性がある。

「看護師の死生観尺度」は看護師を対象にした尺度として初めて生と死を含めた死生観を測った尺度である。治療や献体に関する項目が含まれているなど、看護師の特徴的な死生観を明らかにしている。しかし、因子名が表すものが不明確な部分がある。具体的には、人の成長に果たす役割に対する価値観や死に対する準備の必要性に対する価値観を測る項目が含まれる因子を「死の準備教育」と命名しているが、因子名をみただけではその得点の高低が何を指すのかを判断しにくい。また、自己の死と患者の死の両方が含まれているが、「誰の死か」を区別することの重要性が指摘されていること(田中・斎藤, 2013)を考えるとこの点も課題であると言える。

「生と死に対する態度尺度」は5つの尺度の中でも特に生と死の両方に対する態度を含めることを意識して作成された尺度だと言え、「生と死のつながり」というそれまでに作成された尺度には含まれな

い日本人の死生観の新たな側面を明らかにした点が優れている。しかし「生と死に対する態度」と「死生観」の関係が明記されておらず、また他の4つの尺度には見られる死を回避する傾向や死を解放と捉える傾向を測る項目がないことから、この尺度が死生観を総体的に測ろうとしているのか、死生観の一部を測っているのか、それとも別の概念を測っているのか判断しづらく使用者によって解釈が異なる可能性があるという問題がある。

このようにそれぞれの尺度を検討すると、日本人の死生観を測るには、明確な定義に沿って作成され、齟齬が生じない妥当な因子名がつけられていて、回答者の負担にならない項目数に抑え、先行研究を踏まえた構成になっている尺度が必要であると言える。また、青年期における死に対する態度尺度について中高年者を対象に調査し因子分析を行うとその構成が一部変わることが示されているように（丹下・西田・富田・安藤・下方, 2013）、死生観尺度は対象者ごとに適用可能性を検討する必要があると考えられる。今後は日本人の死生観の全体像の解明に近づくために、既存の各尺度の長所を取り入れ不足点を補うことで発展させた統一的な尺度の作成を目指すべきである。

## おわりに

本稿では、日本人の死生観には生死をひとまとまりに捉えるという日本文化的価値観に基づいた死生観が含まれていることを示し、今後の死生観研究は西洋の死生観研究のように死のみに焦点を当てるのではなく、生と死の両方に焦点を当てて行うべきであることを指摘した。この指摘に基づき、今後改めて尺度構成や構成要素間の関係、他の関連要因に関する研究を行うことで、日本人の死生観の構造の解明に近づくことが期待される。

## 引用文献

- Donnelly, R., Umberson, D., & Pudrovska, T. (2020). Family Member Death and Subjective Life Expectancy among Black and White Older Adults. *Journal of Aging and Health*, 32 (3-4), 143-153.
- Gesser, G., Wong, P. T. P., & Reker, G. T. (1988). Death Attitudes across the Life-Span: The Development and Validation of the Death Attitude Profile (DAP). *OMEGA - Journal of Death and Dying*, 18 (2), 113-128.
- 平井 啓・坂口 幸弘・安部 幸志・森川 優子・柏木 哲夫 (2000). 死生観に関する研究——死生観尺度の構成と信頼性・妥当性の検証—— 死の臨床, 23 (1), 71-76.
- 金児 暁嗣 (1994a). 大学生とその両親の死の不安と死観 大阪市立大学文学部紀要, 46 (10), 537-564.
- 金児 暁嗣 (1994b). 来世信仰は死の不安を和らげるか? (pp. 29-66) 大阪市立大学.
- 川島 大輔 (2019). 日本語版 Revised Death Anxiety Scale の作成 中京大学心理学研究科・心理学部紀要, 18 (1), 1-9.
- 隈部 知更 (2006). 日本人の死生観に関する心理学的基礎研究——死への態度に影響を及ぼす4要因についての分析—— 健康心理学研究, 19 (1), 10-24.
- Kumagai, Y., Morioka, I., Yoshimasu, K., Tomita, H., Miyai, N., & Miyashita, K. (2008). Relationships of self-reported physical health, sociability, and spiritual life with mental health: an investigation according to gender and life stage. *Nippon Eiseigaku Zasshi. Japanese Journal of Hygiene*, 63 (3), 636-641.
- 丸山 久美子 (1997). QOLD評価測定尺度に関する基礎的研究 (1) 聖学院大学論叢, 9 (2), 139-156.
- 森口 眞衣 (2017). 「生を支え続ける死」としての輪廻転生思想——古代インド思想における死生観—— 北海道生命倫理研究, 1, 15-28.
- 内閣府 (1972). 国民生活に関する世論調査 (昭和47年版).
- 内閣府 (1978). 国民生活選好度調査 (昭和53年版).
- 内閣府 (2011). 国民生活選好度調査 (平成23年版).
- 内閣府 (2019). 国民生活に関する世論調査 (令和元年版).
- Nisbett, R. E. (2003). *The geography of thought: how*

- Asians and Westerners think differently... and why.*  
New York: The Free Press. (ニスベット, R. E.  
村本 由紀子 (訳) (2004). 木を見る西洋人  
森を見る東洋人 ——思考の違いはいかにして  
生まれるか—— ダイヤモンド社)
- 越智裕子. (2014). 非日本人高齢者の死生観移管す  
る実証的文献——死生観の行動的視点に対す  
る分析——. 聖学院大学大学院アメリカ・ヨー  
ロッパ文化学研究科博士論文.
- 大石 和男 (2007). 大学生における生きがい感と死  
生観の関係 健康心理学研究, 20 (2) , 1-9.
- 岡本 双美子・石井 京子 (2005). 看護師の死生観  
尺度作成と尺度に影響を及ぼす要因分析 日本  
看護研究学会雑誌, 28 (4) , 53-60.
- 澤井 敦 (2002). 「死のタブー化」再考 社会学評  
論, 53 (1) , 118-134.
- 島菌 進 (2012). 近代日本の死生観言説と死生学 —  
—伝統的な死生観の継承と展開—— 神学研究,  
59, 127-141.
- Spilka, B., Minton, B., Sizemore, D., & Stout, L. (1977).  
Death and Personal Faith: A Psychometric  
Investigation. *Journal for the Scientific Study of  
Religion*, 16 (2) , 169.
- 田中 愛子 (2001). 共分散モデルを用いた老年期と  
青・壮年期の「死に関する意識」の比較研究 山  
口医学, 50 (6) , 801-811.
- 田中 美帆・斎藤 誠一 (2013). 生と死に対する態  
度研究の概観と展望 神戸大学大学院人間発達  
環境学研究科研究紀要, 7 (1) , 181-186.
- 田中 美帆・斎藤 誠一 (2016). 成人期の生と死に  
対する態度尺度の構成 カウンセリング研究,  
49 (3-4) , 160-169.
- 丹下 智香子 (1999). 青年期における死に対する態  
度尺度の構成および妥当性・信頼性の検討 心  
理学研究, 70 (4) , 327-332.
- 丹下 智香子 (2002). 「死」からの連想後のKJ法に  
よる分類 名古屋大学大学院教育発達科学研  
究科紀要 心理発達科学, 49, 157-168.
- 丹下 智香子・西田 裕紀子・富田 真紀子・安藤 富  
士子・下方 浩史 (2013). 中高年者に適用可  
能な死に対する態度尺度 (ATDS-A) の構成お  
よび信頼性・妥当性の検討 日本老年医学会雑  
誌, 50 (1) , 88-95.
- Templer, D. I. (1970). The construction and validation of  
a Death Anxiety Scale. *The Journal of General  
Psychology*, 82 (2 d Half) , 165-177.
- Tierney, L. (2001). Changing Attitudes Towards Death  
and Suffering: A Cultural Perspective on The  
Euthanasia Debate. *Sociology*.
- Van Laarhoven, H. W. M., Schilderman, J., Verhagen, C.  
A. H. H. V. M., Vissers, K. C., & Prins, J. (2011).  
Perspectives on death and an afterlife in relation to  
quality of life, depression, and hopelessness in  
cancer patients without evidence of disease and  
advanced cancer patients. *Journal of Pain and  
Symptom Management*, 41 (6) , 1048-1059.
- 渡辺 勝義 (2012). 日本精神文化の根底にあるもの  
(十一) ——「神道の生死観」について—— 長  
崎ウエスレヤン大学現代社会学部紀要, 10 (1) ,  
1-20.
- 渡辺 正雄 (2003). 日本人の自然観 ——西洋との  
比較—— 人文社会科学研究所年報, 1, 11-34.
- Walter, T. (2003). Historical and cultural variants on the  
good death. *BMJ*, 327 (7408) , 218-220.
- Wong, P. T. P., Reker, G. T., & Gesser, G. (1994). The  
Death Attitude Profile-Revised (DAP-R) : A  
Multidimensional Measure of Attitudes Towards  
Death. In *Death anxiety handbook: Research,  
instrumentation, and application* (pp. 121-148) .
- Wong, P. T. P., & Tomer, A. (2011). Beyond terror and  
denial: The positive psychology of death acceptance.  
*Death Studies*, 35 (2) , 99-106.